

小針型坏と埼玉古墳群

山田 琴子

はじめに

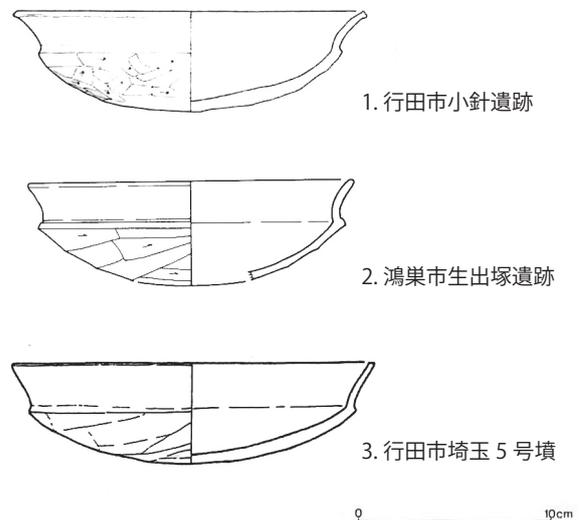
小針型坏とは、古墳時代後期の一時期に埼玉古墳群周辺において見られた坏蓋模倣坏のうち、特に大型で口縁部が大きく外反する形状の土師器坏である。特に精選された胎土と白色の堅緻な焼き上がりが特徴とされる。

行田市小針遺跡B地点の発掘調査の際に初めて確認され、担当者の斎藤国男によって紹介された(行田市教育委員会1980)。この中で、小針遺跡から出土したこの特徴的な土師器坏の3段階の変遷を示し、出現の時期をFA 降下前後の6世紀中葉前後とした。そして、「直立していた口縁部が外に開いていく変化。それに伴う口径の大型化が6世紀後半から7世紀の特徴である。次の段階として、(中略)小型化の傾向へと向かい、(中略)更なる小型化や暗文系土器、有段口縁坏と8世紀前半頃共伴することによってこの土器群は消滅する」としている(斎藤1984)。また、その後の小針遺跡第3次調査の報告の中では、「市内の中で埼玉古墳群周辺とそれ以西の地域で同時期に使用する土器がいわば白系と黒系に分かれている状態」としている(行田市教育委員会1990)。

若松良一は、瓦塚古墳の造出しから出土した土師器坏を紹介する中で、「その分布は、生出塚第1号墳の出土例を除けば、小針遺跡と埼玉古墳群内に限定されている」とし、この坏に「埼玉型の坏」と命名した(若松1990)。

田中広明は、若松のいう「埼玉型の坏」の名称について「命名には、その土器群の形態的特徴を用いるか、分析可能な遺跡名称を冠するのが穏当」であるため不適切であるとし、この坏に初めて「小針型坏」の名称を与え、同じ形態でも赤橙色の色調のものを「小針型坏と類似する土器」として弁別した(田中1991)。また、小針型坏は埼玉古墳群の家産的な集落が採用した独自の型式の食膳具であり、小針型坏の供給圏は生出塚埴輪窯跡群の埴輪の供給圏と一致し、埼玉古墳群の持つ首長権の影響範囲と一致すると述べている(田中1992)。

劔持和夫は築道下遺跡の報告の中で、小針型坏と田中のいう「小針型坏と類似する土器」を合わせて「小針型‘系’坏」とし、他の型式の土師器坏と共に編年を組み、消長を整理した(劔持2000)。そして「6世紀第Ⅱ四半期頃、国造制という支配体制をにらんだ畿内政権の強力な介入の下、(埼玉古墳群内の)同族内で首長権の移動」と連動して、首長権を獲得した氏族グループが生出塚埴輪窯跡群の埴輪生産・供給体制を背景として導入した、極めて属性の強い家産的な土



第1図 小針型坏の出土例

器が小針型坏であったとしている。また、白色の「小針型坏」と、橙色の「小針型坏と類似する土器」の違いについては、前者を埼玉古墳群の首長権を握る中枢の氏族グループ、後者を傍系、もしくは擬制的な関係下に結集したグループの違いを表すものという可能性を示した。

これまでに小針型坏について言及した研究より、小針型坏が出現するのは6世紀第2四半期頃であり、消滅するのは6世紀末頃であることが明らかとなっている。この期間は生出塚埴輪窯が大規模に埴輪の生産を開始してから供給を停止するまでの期間とほぼ一致しており、また小針型坏の分布範囲は生出塚埴輪窯跡群の埴輪の分布範囲とも重なるとされることから、生出塚埴輪窯跡群と、その生産や製品の供給に関わった埼玉古墳群の被葬者とも深い関わりがある可能性が指摘されている。

しかし、小針型坏と呼称されているものの中には白色系の胎土のものと橙色系・褐色系の胎土のものとが確認されているものの、この違いが区別されずに言及されているものが多い。胎土の違いがその坏を生産、もしくは使用した集団の違いを反映している可能性があるのであれば、この色調の違いを詳細に調べることで、この坏が出土した集落の性格を把握することに繋がる。また、生出塚埴輪窯跡群での埴輪の生産や供給については、近年の研究の成果から詳細が明らかになっている(城倉2011、2018、山崎2004)。また、こうした状況を踏まえ、埴輪の生産や供給と小針型坏とを関連させて検討することにより、小針型坏の性格も明らかにすることができるのではないかと考えられる。

1. 小針型坏の分布

これまでに小針型坏は埼玉古墳群周辺、もしくは埼玉古墳群以東に分布するということが指摘されていたが、確実な出土地点が検討されたことはなかった。ここでは埼玉古墳群とその周辺の古墳時代後期の遺跡から出土した小針型坏の分布範囲について取り上げることとしたい。

なお、ここでは発掘調査報告書が刊行された遺跡の中から、古墳時代後期のものとされる土師器坏のうち、大型で口縁部が大きく外反し、また口縁部と体部とに明瞭に区別のあるものを小針型坏としてカウントした。大型という基準では曖昧であることから、口径14cm以上のものと定めた。14cmとした理由は、一般的な土師器の、須恵器の坏蓋を模倣した形状のいわゆる「坏模倣坏」の平均的な口径が12～13cmであることから、それよりも大型のものを選別するためである。また、胎土については発掘調査報告書に記載されている色調を元にして「白系」と「橙・褐色系」を区別し、色調についての記載のないものは「色調不明」とした⁽¹⁾。なお、胎土が白系の「小針型坏」と、胎土が橙色系・褐色系の「小針型坏と類似する土器」の呼び分けについては、この稿の中では区別せずに「小針型坏」と呼称する。区別する際には「小針型坏(白色系)」と「小針型坏(橙・褐色系)」とする。

表1は小針型坏が出土した遺跡と、各遺跡から出土した小針型坏がどの色調なのかを示したものである。また、第2図は小針型坏が出土した遺跡の位置を示している。

表1を見ると、白色系の小針型坏が出土しているのは埼玉古墳群、小針遺跡、築道下遺跡、生出塚遺跡の4遺跡のみであり、橙色系・褐色系の胎土のものを出土した遺跡数が圧倒的に多い。遺跡の分布からは大宮台地の縁辺部や自然堤防上の、河川に沿って形成された集落や古墳からの出土が目立つ。

表1 小針型坏が出土した遺跡

No.	所在地	出土遺跡	白色系	橙色・褐色系	色調不明	
1	行田市	瓦塚古墳	●			
2		埼玉古墳群	鉄砲山古墳	●	●	
3			埼玉5号墳		●	
4			小針遺跡	●		●
5		高畑遺跡		●	●	
6		築道下遺跡	●	●		
7		船原・内郷遺跡		●		
8		小敷田遺跡			●	
9	鴻巣市	生出塚遺跡	●	●		
10		新屋敷遺跡		●		
11		赤台遺跡		●		
12		笠原古墳群			●	
13		宮前本田遺跡		●		
14	熊谷市	北島遺跡		●		
15		下田町遺跡		●		
16		藤之宮遺跡		●		
17	加須市	小沼耕地遺跡		●		
18		中種足五番遺跡			●	
19		上種足三番遺跡			●	

高畑遺跡は忍川を挟んで埼玉古墳群の対岸に位置し、また、船原・内郷通遺跡は埼玉古墳群と同じ台地の南方に位置する。赤台遺跡、宮前本田遺跡は現在の荒川に面する大宮台地西縁のそれぞれ異なる舌状台地上に位置している。下田町遺跡は荒川とその支流の和田吉野川の合流地点の自然堤防上に立地している。小敷田遺跡、藤之宮遺跡、北島遺跡は荒川によって形成された新期荒川扇状地縁辺部の自然堤防上に位置している。小沼耕地遺跡、中種垂五番遺跡、上種垂三番遺跡は見沼代用水(旧星川)の南側微高地上に位置している。

次に各遺跡から出土した白色系と橙・褐色系の小針型坏の点数、そして他の形式の土師器の坏と比較して小針型坏がどれ程の割合で使用されていたものかを見てみたい。

表2は小針型坏を出土した各遺跡の遺構のうち、竪穴住居から出土した土師器の坏を分類してカウントしたものである。また、表3は表2をグラフ化して各形式の坏がどれ程の割合で出土しているのかを示したものである。各遺構から出土した土師器坏を、①小針型坏、②須恵器坏を模倣したいわゆる模倣坏、③関東西部の比企地方から多摩地方にかけて分布する比企型坏、④埼玉県北部から群馬県平野部にかけて分布する、口縁部が複数の段で構成される有段口縁坏、⑤その他の形式の坏として分類して示した。このうち小針型坏は白色系、橙・褐色系、色調不明として分けている。また、各遺跡は発掘調査報告書の中で位置付けられた时期的な変遷に沿って並べている。築道下遺跡と下田町遺跡については発掘調査によって検出された遺構数が膨大であるが、このうち古墳時代後期の遺構の分布が多いとされる築道下遺跡C区を、下田町遺跡については第4次調査の発掘調査成果を取り上げている。さらに、上記の2遺跡は小針型坏が出土した遺構の数が多いため、発掘調査報告書の中で提示された年代的な位置付けごとに各遺構から出土した点数を合計して示している。

なお各遺跡の年代については、小針遺跡B地点10号住居跡からはMT15型式期に併行する須恵器坏蓋が出土している。また、6号住居跡は6世紀第3四半期に、2号住居跡は6世紀第4四半期にそれぞれ比定されている。小針遺跡3次調査では6号住居跡、15号住居跡が6世紀中頃、7号住居跡、2号住居跡、3号住居跡が6世紀後半に位置付けられ、10号住居跡は7号住

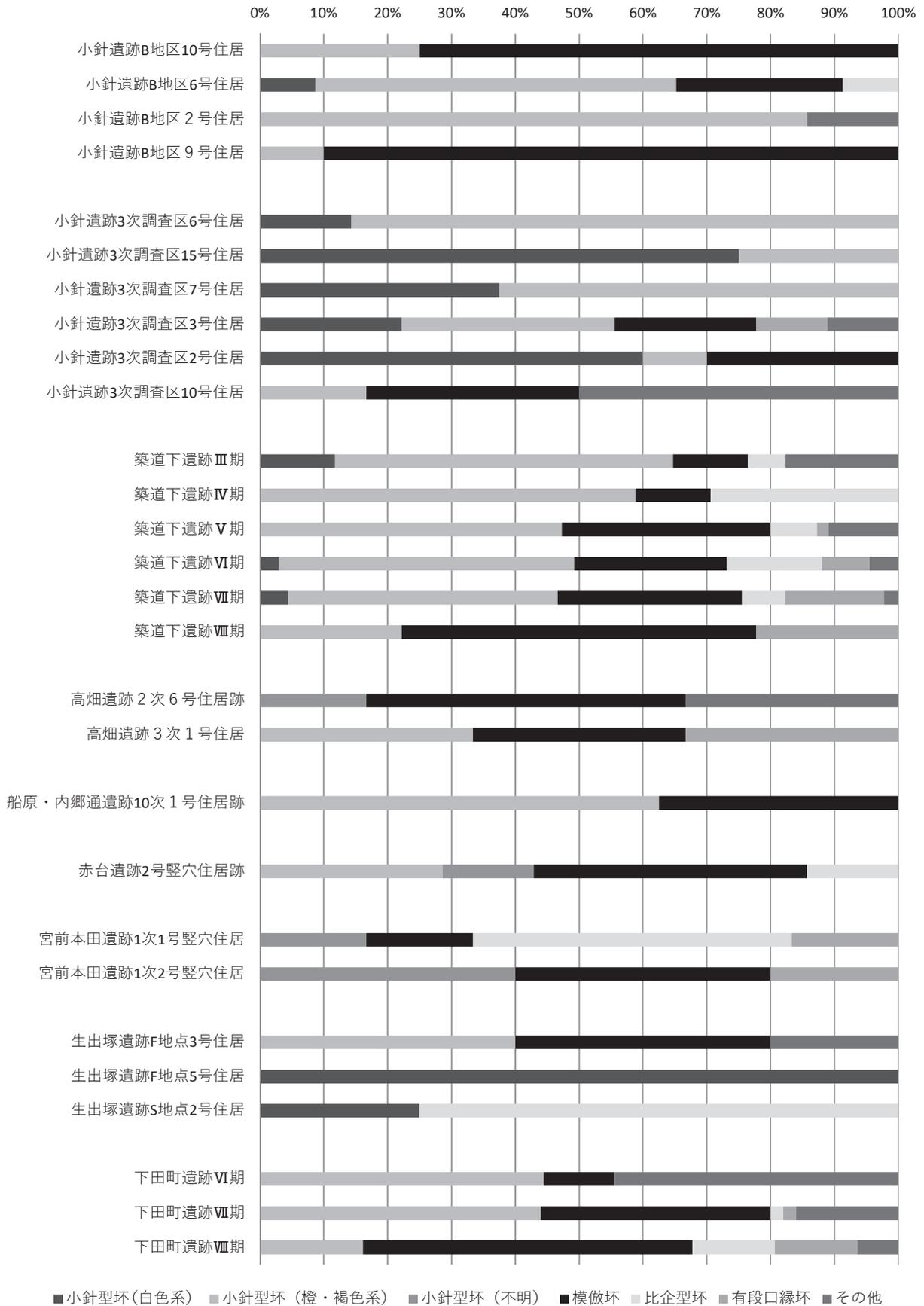
居跡を切って作られていることが報告されている。高畑遺跡2次6号住居跡は6世紀第1～2四半期に、高畑遺跡3次1号住居跡は6世紀第3四半期にそれぞれ比定されている。船原・内郷通遺跡1号住居跡はTK10型式の須恵器坏蓋を出土している。築道下遺跡Ⅲ期・Ⅳ期は6世紀第2四半期を中心とする6世紀中葉前後、Ⅴ期は6世紀第3四半期、Ⅵ期は6世紀第4四半期古段階、Ⅶ期は6世紀第4四半期新段階、Ⅷ期は6世紀末にそれぞれ相当するとされている。また、宮前本田遺跡1次1号住居跡、2号住居跡は7世紀前半として報告されている。また、生出塚遺跡F地点3号住居跡、5号住居跡、S地点2号住居跡は6世紀中頃に、赤台遺跡2号住居跡は6世紀第2四半期にそれぞれ伴出した土器から位置付けられる。下田町遺跡はⅥ期が6世紀第2四半期、Ⅶ期が6世紀第3四半期、Ⅷ期が6世紀第4四半期にそれぞれ比定されている。

こうしてみると小針型坏のうち、小針型坏は全期間を通じて白色系と橙・褐色系のものが出土していることから、胎土の差は時期差によるものではないことが確認できる。また、白色系と橙・褐色系とが同じ遺構の中から共に出土している例も多い。小針遺跡では白色系のものが高い割合で出土しているが、それ以外の遺跡では橙・褐色系のものが圧倒的に多く出土している。白色系と橙・褐色系の胎土の違いが埼玉古墳群に関わる氏族や政治的なグループの違いを

表2 出土した坏の組成

	小針型坏 (白色系)	小針型坏 (橙・褐色系)	小針型坏 (不明)	模倣坏	比企型坏	有段口縁坏	その他
小針遺跡B地区10号住居		2		6			
小針遺跡B地区6号住居	2	13		6	2		
小針遺跡B地区2号住居		6					1
小針遺跡B地区9号住居		1		9			
小針遺跡3次調査区6号住居	1	6					
小針遺跡3次調査区15号住居	3	1					
小針遺跡3次調査区7号住居	3	5					
小針遺跡3次調査区3号住居	2	3		2		1	1
小針遺跡3次調査区2号住居	6	1		3			
小針遺跡3次調査区10号住居		1		2			3
築道下遺跡Ⅲ期	2	9		2	1		3
築道下遺跡Ⅳ期		10		2	5		
築道下遺跡Ⅴ期		52		36	8	2	12
築道下遺跡Ⅵ期	2	31		16	10	5	3
築道下遺跡Ⅶ期	2	19		13	3	7	1
築道下遺跡Ⅷ期		2		5		2	
高畑遺跡2次6号住居跡			1	3			2
高畑遺跡3次1号住居		1		1		1	
船原・内郷通遺跡10次1号住居跡		5		3			
赤台遺跡2号竪穴住居跡		2	1	3	1		
宮前本田遺跡1次1号竪穴住居			1	1	3	1	
宮前本田遺跡1次2号竪穴住居			2	2		1	
生出塚遺跡F地点3号住居		2		2			1
生出塚遺跡F地点5号住居	1						
生出塚遺跡S地点2号住居	1				3		
下田町遺跡Ⅵ期		4		1			4
下田町遺跡Ⅶ期		22		18	1	1	8
下田町遺跡Ⅷ期		5		16	4	4	2

表3 出土した坏の組成(グラフ)



表すものとするれば、埼玉古墳群と対立するグループを表す橙・褐色系の小針型坏が圧倒的に多数となり、小針型坏の出現から約半世紀に亘って埼玉古墳群の周辺に同規模の古墳群が築造されないという状況が続くことが説明し難い。

小針型坏と共に出土した他の形式の坏との割合を比較してみると、小針遺跡では全体的に小針型坏の割合が高いが、時期を経るに従い他の形式の土器の割合が増えてくる。築道下遺跡でも小針型坏の割合が高く、Ⅲ、Ⅳ期には50%を超えているものの、Ⅷ期には30%を下回る。下田町遺跡でもⅥ期、Ⅶ期には40%を上回る割合で小針型坏が出土しているが、Ⅷ期には20%を下回る。一方で、小針型坏以外の坏が出土する割合は時期を経るに連れて増加しているが、特に有段口縁坏が増加する傾向が顕著に見て取れる。比企型坏の出土した割合は遺跡ごと、年代ごとにばらつきがあるために全体的な傾向は掴みづらいものの、築道下遺跡や下田町遺跡では一定の割合で出土している。

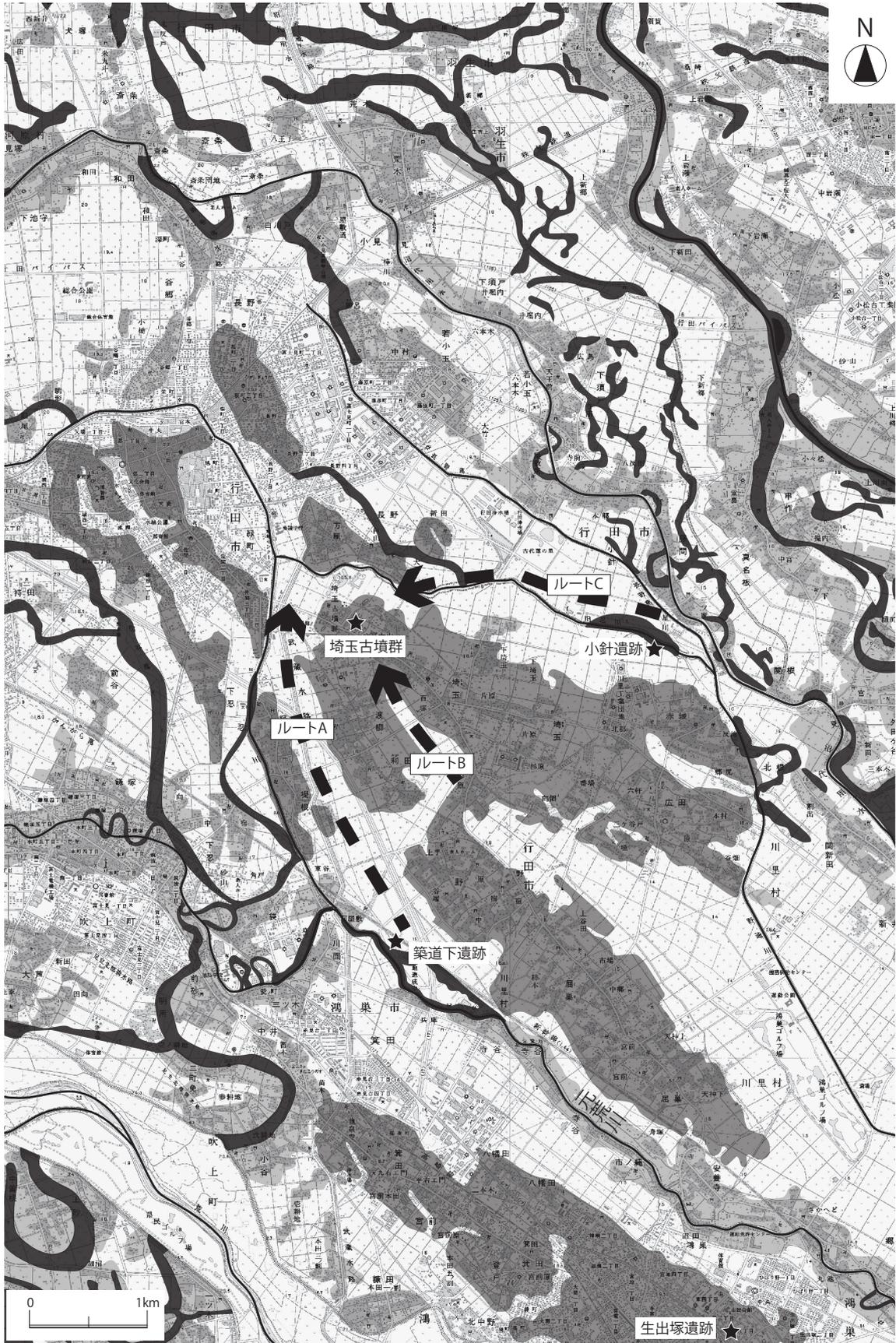
以上のことから白色系の小針型坏が出土した遺跡は数が限られており、圧倒的に橙・褐色系の小針型坏の出土数が多いこと、出土する範囲は埼玉古墳群の東西に分布し、台地の縁辺や自然堤防上に多いことが分かる。

このうち、白色系のものが出土した埼玉古墳群、小針遺跡、築道下遺跡、生出塚遺跡についてその性格を考えてみたい。

小針遺跡は旧忍川両岸に広がる、古墳時代から平安時代にかけての大集落である。当該時期の竪穴住居160軒と掘立柱建物跡10棟の他、方形周溝墓、集落の区画溝、大型竪穴なども検出されている(浅見2006)。また、「文部鳥麻呂」の文字が線刻された紡錘車も確認されていることから、武蔵国造「文部直」との関係も指摘されており、埼玉郡家に関わる遺跡であるとする意見(井上2011)や、文部を埼玉郷における有力豪族とし、小針遺跡をその拠点と考える意見もある(塚田2008)。

築道下遺跡は元荒川に沿った自然堤防上に位置する、古墳時代から平安時代にかけての集落遺跡である。埼玉古墳群と同様に5世紀後半頃に出現することから、埼玉古墳群形成と大きな関わりがあった遺跡であると考えられている。築道下遺跡は河川沿いに営まれた集落でありながら土錐が発見されていないことから、漁業に依拠していなかったことがうかがわれる。また、古墳時代の住居からは、鉄製品と共に凝灰岩製の砥石が数多く出土していることから、石材や船の製造・修理との関わりが指摘されている(井上2011)。さらに7世紀後半以降は大型掘立柱建物が川沿いに数多く建て並ぶことから、古墳時代から平安時代に至るまで港湾遺跡として機能していたとの可能性も指摘されている。

生出塚遺跡は大宮台地の北端部東辺に立地する、旧石器時代から中近世にかけての複合遺跡であるが、古墳時代の遺構としては埴輪窯、工房跡、住居跡、古墳跡などが確認されている。中でも埴輪窯は40基確認されており、東日本最大級の規模を誇る埴輪生産遺跡である。この生出塚窯で生産された埴輪は、その形態や胎土、用いられた工具の特徴などから、埼玉県内から千葉県、東京都、神奈川県にかけての広い範囲の古墳に供給されたことが明らかとなっており(山崎2004、城倉2009)、埼玉古墳群とも深い関わりがあることが明らかとなっている。このことについては後述する。なお、生出塚遺跡の北西側に隣接する新屋敷遺跡では77基の古墳群が確認されているが、このうちの11号墳からも小針型坏が出土している。



第3図 埼玉古墳群に石材を運んだルート

小針型坏(白色系)が出土したこれらの3遺跡については、埼玉古墳群、そして水運との深い関わりが指摘されている。将軍山古墳の石材を埼玉古墳群まで運ぶ上で、最も近い航行可能な舟運のルートが検討されている(井上2011)。なお、埼玉古墳群のすぐ北側を流れる現在の旧忍川は、古墳時代には小さな谷地形か窪地であり、河川は存在しなかったと考えられるため、舟運のルートとしては想定されていない。

井上が想定した舟運の3つのルートと小針型坏を出土した遺跡の位置を合わせて示したものが第3図である。

ルートAは、埼玉古墳群の西側に沿って、現在の武蔵水路や元荒川支流の忍川と並行して南北方向に伸びる低地を通るものである。ルートBは前玉神社の東側の南北方向に伸びる谷を通るものである。ルートCは埼玉古墳群東側2kmの旧忍川下流側から続く小針沼と長野落に沿って続く低地を通るルートである。

このうち、ルートBは浅い谷頭の湧水地点であり、水路として利用するほどの水量が見込めないために舟運のルートとしては想定しづらい。ルートAは忍川に並行しており、埼玉古墳群から3.5km南側の元荒川との合流点には築道下遺跡が所在する。また、ルートAで通行している低地を挟んで埼玉古墳群の対岸側には高畑遺跡が所在する。ルートCの低地北側には小針遺跡が所在しており、旧忍川は小針遺跡の約1.5km下流で星川と合流する。なお、星川は約17km下流の蓮田市と白岡市の境界付近で元荒川と合流し、元荒川はさらに下流の越谷市で中川と合流する。中川は東京都葛飾区で荒川と合流して東京湾に注いでいる。ルートA、Cは将軍山古墳の石材の運搬に限らず、古墳に樹立された埴輪や供献された須恵器などの様々な物資を運搬するために用いられた舟運のルートである。生出塚遺跡は元荒川の右岸に所在し、築道下遺跡の約4km下流の対岸に位置している。生出塚遺跡の北側には沼地を望んでおり(鴻巣市1988)、元荒川を通じて製品である埴輪を運搬するには便利な場所に位置していたことがうかがえる。井上は、埼玉将軍山古墳の石室の石材の運搬ルートを考える上で、石室の石材である房州石を積んだ船は中川から元荒川水系に入り、築道下遺跡で小型の船に荷を積み替えて細い水路を北上して埼玉古墳群西側に接岸したと想定している。海上や元荒川を航行する大きさの船が直接古墳群に至る水路を遡上することは不可能であったとし、築道下遺跡で石材を下ろした後、元荒川を下って生出塚遺跡近くの沼地へ停泊し、埴輪を積んで各地の古墳へ向かったものとしている。

このように考えると、小針型坏(白色系)を出土した遺跡は埼玉古墳群を巡る舟運ルートの要所から出土していることが分かる。一方、小針型坏(橙・褐色系)が出土した遺跡についても、下田町遺跡は古墳時代後期の溝から海生の貝殻が出土しており、また古代には港湾に関すると考えられる水路や建物が発見されるなど、舟運に深く関わる遺跡として指摘されている(赤熊2006、考古専門部会2011)。また、小敷田遺跡、北島遺跡においても発掘調査によって河川や溝跡が発見されている。このような河川を利用した自然堤防間を結ぶ内水面交通により、扇状地縁辺部に所在する遺跡にも小針型坏が運ばれたものと考えられる。しかし、これらの遺跡は河川交通による交流は存在したものの、埼玉古墳群からは距離が離れており、直接物資を運ぶ主要な拠点には立地していない。白色系と橙・褐色系の違いは、埼玉古墳群を巡る舟運ルートの立地とも関係する可能性が考えられる。

表4 生出塚窯産の埴輪を出土した古墳

番号	古墳	所在地
1	埼玉二子山古墳	行田市
2	埼玉鉄砲山古墳	行田市
3	埼玉將軍山古墳	行田市
4	埼玉瓦塚古墳	行田市
5	埼玉愛宕山古墳	行田市
6	埼玉天祥寺裏古墳	行田市
7	埼玉5号墳	行田市
8	真名板高山古墳	行田市
9	武良内古墳群	行田市
10	白山古墳群	行田市
11	新屋敷古墳群	鴻巣市
12	三島神社古墳	鴻巣市
13	袋・台古墳群	鴻巣市
14	弁天塚古墳	東松山市
15	小沼耕地遺跡	加須市
16	大境遺跡	熊谷市

表5 小針型環を出土した古墳

番号	遺跡	所在地	
A	埼玉瓦塚古墳	行田市	
B	埼玉鉄砲山古墳	行田市	
C	埼玉5号墳	行田市	
D	生出塚遺跡H地点第1号墳	鴻巣市	
E	新屋敷遺跡A区第11号墳	鴻巣市	
F	笠原古墳群	鴻巣市	
H	上種足三番遺跡	1号墳	加須市
		2号墳	
I	小沼耕地遺跡	1号墳	加須市
		2号墳	
J	北島遺跡第19地点1号墳	熊谷市	



第4図 生出塚窯産埴輪の出土古墳と小針型環出土古墳の分布

2. 埴輪生産と小針型坏

先述の通り、小針型坏の供給圏は生出塚遺跡内の埴輪窯跡群(以下、生出塚窯)で生産された埴輪の供給圏と一致し、埼玉古墳群の持つ首長権の影響範囲と一致するという指摘が田中広明によってなされている。埼玉古墳群の持つ首長権とは、田中の論を要約すると、以下の通りである。このシステムは埴輪生産や古墳築造などの労働力を提供した在地の首長層に対して、生出塚窯産の埴輪を供給するというものであり、埼玉二子山古墳段階に、小針型坏の出現を契機として生出塚窯での大規模な埴輪生産の開始と共に確立した。

第4図は、現在までに判明している生出塚窯産の埴輪の分布を示すと共に、埼玉古墳群周辺の小針型坏を出土した古墳の位置を示したものである。これを見ると、生出塚窯産の埴輪と小針型坏の出土した古墳とは、必ずしも一致していない。また、先に見た通り小針型坏は小針遺跡、築道下遺跡、下田町遺跡で特に多く出土しており、生出塚遺跡では白色系のものは出土しているものの分布の中心をなすとは言い難い。こうしたことから生出塚窯と小針型坏の直接的な関連は考え難い。

なお、生出塚窯産の埴輪については研究が進展し、埼玉県内のみならず、東京都、神奈川県、千葉県までを含む幅広い範囲まで供給されていたことが判明している。この分布範囲は城倉正祥が指摘する通り比企型坏の分布範囲と一致すると言えよう(城倉2011)。田中が指摘する通り、小針型坏は埼玉古墳群と深く関係するものと考えられるが、生出塚窯産埴輪の生産と共通のみに目を向けるのではなく、その出土が意味するものは小針型坏のさらに広域の分布域を把握した上で、比企型坏の分布や出土傾向とも合わせて検討する必要がある。

終わりに

埼玉古墳群周辺の小針型坏の分布範囲と出土の傾向を確認した。従来言われていたよりも埼玉古墳群を中心とした広い範囲から出土しており、また河川沿いの遺跡を中心に出土する傾向が明らかとなった。また、生出塚窯が大規模に生産を開始してから操業を停止するまでの期間と小針型坏の出現から消滅までの期間はほぼ重なるが、生出塚窯から埴輪を供給された古墳と小針型坏を出土した古墳が必ずしも一致しない点、また、生出塚遺跡から出土した小針型坏の点数が少量である点からは、小針型坏を生出塚窯の埴輪の生産・供給と関連させて考えることには慎重にならざるを得ない。小針型坏がどのような性格を有するものかを明らかにするためには、さらに広域な分布範囲を把握した上で検討する必要がある。その上で、埼玉周辺、比企、大里、北足立を埼玉古墳群造営主体の支配領域、生出塚窯産埴輪と比企型坏の分布範囲を「流通経済圏」と把握すべきとした城倉の指摘(城倉2011)は、小針型坏の性格を明らかにする上で重要なものと考えられる。

最後に、本稿を記すに当たり井上尚明氏には古墳時代の舟運に関する文献をご教示いただきました。また、鴻巣市教育委員会、行田市教育委員会には図版の使用についてご快諾いただきました。ここに記して感謝申し上げます。

註

- (1)本来であれば資料を実見し、筆者の判断によって土器の分類を行うべきではあるが、原稿作成時期が新型コロナウイルス感染症拡大のための緊急事態宣言中ということもあり、資料の実見が叶わず、発掘調査報告書に記載された内容による検討を行わざるを得なかった。後日、改めて資料を実見して資料の検討を行いたい。

図版出典

- 第1図 1 鴻巣市教育委員会 1988より
2 行田市教育委員会 1980より
3 埼玉県教育委員会 1988より
第2図 筆者作成
第3図 井上 2011を元に筆者作成
第4図 城倉 2018を元に筆者作成

参考文献

- 赤熊浩一 2006 「古墳時代の河川交易—下田町遺跡へ貝を運んだ道—」『研究紀要』第21号 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 浅見貴子 2006 「行田市小針遺跡(第4次・5次)の調査」『第39回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会・財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団・埼玉県立さきたま史跡の博物館
- 井上尚明 2011 「『埼玉の津』と將軍山古墳」『埼玉考古』46 埼玉考古学会
- 行田市教育委員会 1980 『行田市文化財調査報告書 第10集 小針遺跡発掘調査報告書—B地区—』行田市教育委員会
- 1990 『行田市遺跡調査会報告書 第2集 小針遺跡—第3次調査報告書—』行田市遺跡調査会
- 剣持和夫 2000 「Ⅴ 結語 1. 築道下遺跡出土土器について」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第245集 築道下遺跡Ⅲ』財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 考古専門部会 2011 「座談会 荒川の流路と遺跡—荒川新扇状地の形成と流路の変遷—」『熊谷市史研究』第3号 熊谷市教育委員会
- 鴻巣市 1988 『鴻巣市史資料編Ⅰ』
- 鴻巣市教育委員会 1988 『鴻巣市文化財調査報告 第4集 鴻巣市遺跡群Ⅳ 箕田2号墳 生出塚遺跡F地点 馬室埴輪窯跡群』
- 埼玉県教育委員会 1988 『埼玉古墳群発掘調査報告書 第6集 丸墓山古墳 埼玉1～7号墳 將軍山古墳』
- 斉藤国夫 1984 「埼玉古墳群をめぐる諸問題」『原始古代社会研究』6 原始古代社会研究会
- 城倉正祥 2011 「武蔵国造争乱—研究の現状と課題—」『史観』第165冊 早稲田大学史学会
- 2018 「第5節 埼玉古墳群出土の円筒埴輪の特徴と編年の位置付け」『史跡埼玉古墳群総括報告書Ⅰ』埼玉県教育委員会
- 「第6節 北武蔵の埴輪生産と埼玉古墳群」『史跡埼玉古墳群総括報告書Ⅰ』埼玉県教育委員会
- 杉崎茂樹 1994 「埼玉古墳群出現当時の地理的景観について」『調査研究報告』第17号 埼玉県立さきたま資料館
- 高田大輔 2010 『シリーズ「遺跡を学ぶ」073 東日本最大級の埴輪工房 生出塚埴輪窯』新泉社
- 田中広明 1991 「古墳時代後期の土師器生産と集落への供給—有段口縁杯の展開と在地社会の動態—」『埼玉考古学論集 設立10周年記念論文集』財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 1992 「Ⅴ 考察—古墳時代後期の北武蔵と新屋敷東遺跡—」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第111集 新屋敷東・本郷前東』財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 塚田良道 2008 「丈部と埼玉の地」『研究報告』6 行田市郷土博物館
- 萩原恭一 2011 「埴輪の生産と供給を胎土分析から考える」『埴輪研究会誌』第15号 埴輪研究会
- 山崎 武 2004 「第3節 生出塚埴輪窯の生産と供給について」『財団法人市原市文化財センター調査報告書 第85集 千葉県 市原市山倉古墳群』財団法人 市原市文化財センター
- 若松良一 1990 「瓦塚古墳の調査から 造り出し出土の供献土器について」『調査研究報告』第3号 埼玉県立さきたま資料館

※小針型杯の集積で参照した発掘調査報告書については、紙幅の都合上記載を割愛させていただきます。